

「改革派教義学の過去・現在・未来—改革派教会の課題と展望」

日時：2023年6月27日（火）

場所：日本キリスト教会札幌北一条教会

担当：宿毛伝道所定住代理宣教教師・牧田吉和

はじめに～感謝の言葉～

1. 記念講演会開催への感謝
2. 主題設定の意図

（I）岡田稔『改革派教理学教本』の歴史的意味とそれ以後の神学的継承

1. 日本キリスト改革派教会史における岡田稔『改革派教理学教本』の記念碑的意味
2. 日本プロテスタント神学史における岡田稔『改革派教理学教本』の歴史的意味～信条教会を基盤とした日本のプロテスタント神学史における最初の教義学～
3. 岡田稔『改革派教理学教本』と岡田神学の特質
 - ① 米国長老教会の神学的伝統：コロンビア神学校（アトランタ）のソーウウェルに代表される南長老教会の神学、ウォーフイルドに代表される古プリンストン神学、メーチェン、J. マーレーに代表されるウェストミンスター神学校の神学的伝統＝ウェストミンスター信条への忠誠 ←岡田神学の根幹を形成。
 - ② オランダ改革派神学の神学的影響：L. ベルコフの組織神学教科書、ヴァン・ティール、バーフィンク、A. カイパー、G. C. ベルクワなどの神学的影響。
3. 岡田稔『改革派教理学教本』以降の改革派教会における神学的継承
 - ① 松田一男牧師（元板宿教会牧師、神学校組織神学講師）のJ. マーレー、C. ヴァン・ティール、H. バーフィンクなどの翻訳出版による神学的貢献。
 - ② オランダ留学によるオランダ改革派神学の強い影響：橋本龍三牧師（元灘教会牧師・神学校校長）、山中良知長老（神港教会、元関西学院大学教授・神学校講師）、春名純人長老（灘教会、元関西学院大学教授・神学校講師）のオランダ留学による神学的影響と貢献。及びCRC（北米・キリスト改革派教会）との宣教協力関係によるオランダ改革派神学の影響（新約学講師・Dr. J. ティマー宣教師、弁証学講師・Dr. シュミット宣教師）←市川牧師、牧田に対する神学的影響。
 - ③ 長老派神学の研究の深まり：矢内昭二牧師、村川満長老（元関西学院大学教授・神学校講師）などによるウェストミンスター信条研究と袴田康裕教授の同信条研究。

- ④ カルヴァン研究の深まり：田中剛二牧師（元神港教会牧師・神学校講師）、森川甫長老（板宿教会、元関西学院大学教授）、さらには吉田隆校長のカルヴァン研究。
- ⑤ 要約：岡田神学以降における神学的伝統形成に見られる顕著な傾向性は、ウェストミンスター信条研究に代表される長老派神学の伝統に加わってきた、「オランダ改革派神学の神学的伝統」。

(II) 『改革派教義学』出版の意義

1. 共同執筆の意味

単独で「教義学」を執筆することの難しさ←神学校で教義学担当が複数で担われるようになってきていること。今日の神学的広がり一人ではカバーできなくなっていること。オランダ改革派教義学の場合：

例：J. van Genderen en W. H. Velema, *Beknopte Gereformeerde Dogmatiek*, Kampen, 1992. (アペルドルン改革派神学大学)
 G. van den Brink en C. van der Kooi, *Christelijke Dogmatiek*, Zoetermeer, 2012. (アムステルダム自由大学)

ただし、最近の単独執筆の例：

南アフリカ・改革派教会：H. Heyns, *Dogmatiek*. Pretoria, 1981←但し、コンパクトな「教義学要綱」。

2. 共同執筆が成立する神学的理由とその神学的重要性

長老主義政治に裏打ちされた共通の信条的基盤に立つ共同の教義学叙述←日本プロテスタント史において最初のケースと思われる。

3. 出版された『改革派教義学』の神学的特質～オランダ改革派神学の自覚的導入～

- ①岡田稔『改革派教理学教本』との共通性←信条的基盤。
- ②岡田稔『改革派教理学教本』との差異性←オランダ改革派神学へのより強い傾向性
 - i. 信条的には「ハイデルベルク信仰問答」、「ドルトレヒト信仰規準」などに代表されるオランダ改革派諸信条が重要な役割を果たす。また、オランダ改革派神学の神学的遺産の導入
 - ii. 神学的には：
 - イ. 市川先生の場合←カルヴィン神学校での学び。特にA. カイパー、H. ドーイウエルトのキリスト教哲学、G. C. ベルクワ、南ア改革派・H. ヘインスなどの神学的影響。
 - ロ. 牧田の場合←カンペン改革派神学大学での学び。特にA. カイパー、H. バーフィンク、K. スキルダー、A. A. ファンルーラー、G. C. ベルクワ、南ア改革派・H. ヘインスなどの影響。
- ③日本の「教義学」の中でオランダ改革派神学の神学的遺産を導入している点で特色ある教義学。

(Ⅲ) 牧田担当分の『改革派教義学』の特色

1. K. バルト神学の評価と批判

- ① “広義”の改革派神学の流れの中にあるバルトの神学的思惟に即したバルト理解～単なる批判のための批判を超えて～
- ②バルトとの批判的対話と歴史的改革派神学の遺産の再検討

2. 『改革派教義学 I』の「序論」の持つ特別な意味

- ①岡田稔『改革派教理学教本』における「序論」の手薄さ←岡田先生自身が自己確認
- ②『改革派教義学』の「序論」は上記の手薄さを補う意味を持つ。日本の教会では意識が希薄な信条の重要性、すなわち信条と教義学との関係、また神学的にほとんど扱われない「神学百科」の問題、他に「バーフィングの聖書論」の持つ神学的豊かさなどが意識的に論じられている。

3. 神中心的包括性

- ①全体の柱としての三位一体論的・神の国的包括性の強調。
- ②『神論』→三位一体論的・神の国的包括性の基盤となる創造における「善き創造」の強調。罪の墮落の徹底性同時にキリストの贖いを通しての創造の本来的意図の回復の強調へと結びつく。いわゆる救済の「再創造」(recreatio)としての理解。
- ③『キリスト論』→キリストとその御業の三位一体論的・神の国展開における位置づけ。とりわけキリストの宇宙論的王権の強調。『キリスト論』の書物の帯の言葉：「キリストの理解によって信仰のあり方が決定される。本書は、改革派神学の特色である包括的な視点から、キリスト論を捉える。信仰者が人生の全領域において神の栄光のために生きる者とされることを願う」。
- ④『救済論』→帯の言葉：「神学は救済的な意味を個人的・教会的枠内で問う傾向を強めてきた。本書は、両者の枠を踏まえつつ、神の国の視点から救済の包括的意味を問う」。例えば、「聖化論」においても「『聖化と神の国』－『世界の聖化』」という項目(209頁以下)。「終末的完成にとしての『栄化』に向かって」(218頁以下)も同様の趣旨。
- ⑤『終末論』→上記と同様、「創造—贖い—聖化・完成」の三位一体の神の歴史支配の踏まえつつ、包括的意味を持つ終末論を展開。この巻の帯の言葉；：「すべての神学的課題は終末論へと流れ込む。終末論においてその神学的本質が姿を現わす。改革派神学は神中心的・包括的終末論を問うのである」。このような包括的終末論は「新しい天と地」(257頁以下)、「栄光の神の国における永遠の命」(277頁以下)などの項に顕著に表れている。岡田稔『改革派教理学教本』ではこの意味での包括的終末論は十分には論じられていない。岡田稔先生は聖定論的神学という点とそれに関係して始源論的神学が強調された。それは有神論的世界観人生観という点でも極めて重要な点。しかし、終末論において具体的に展開されるところまで行かなかったのではないか。今回の「終末論」においてはその点の展開を試みた。

「始源論的・終末論的神学」、そこから生まれてくる神中心的包括性を特徴とする神学的試み。この点では、特にK. スキルダーから多くのことを教えられている。

結 び 改革派神学の将来に向かって～神学的交わりと対話を求めて～

1. 神学の教会的・牧会的性格の堅持の重要性
2. 神学的伝統の継承と展開の重要性
3. 共同性の自覚における神学的営みの重要性